



▼ 「幸福な王子」の鉛の心臓 ▼

校長 小田 恵

今回もツバメ好きな小田の趣味的思考にお付き合いください。
前号で取り上げたオスカー・ワイルド作「幸福な王子」は、このように締めくくられています。

(金銀や宝石がはがれたみすぼらしい幸福な王子像は倒され、解体されました)

「この壊れた鉛の心臓は溶鉱炉では溶けないぞ。捨てなくちゃならんな」心臓は、ごみために捨てられました。そこには死んだツバメも横たわっていたのです。

神さまが天使たちの一人に「町の中で最も貴いものを二つ持ってきなさい」とおっしゃいました。その天使は、神さまのところに鉛の心臓と死んだ鳥を持ってきました。

神さまは「よく選んできた」とおっしゃいました。「天国の庭園でこの小さな鳥は永遠に歌い、黄金の都でこの幸福の王子は私を賛美するだろう」

幸福な王子の像が外面は金銀宝石で飾られているのに、その心臓は鉛でできていることに、ツバメも「この王子は中まで金でできているんじゃないのか！」と違和感を抱いていました。そもそも鉛というのは、金属の中でも金とは違って価値が低いものとされています。そして柔らかいので加工しやすい。また、言葉としては、「鉛のよう」という比喻は重苦しいイメージを表しますし、「鉛色の空」というとどんより重苦しく曇った空を表す、というふうにあまり良いイメージを持っていません(英語のleadも然りです)。その鉛の心臓が溶鉱炉でも溶けず、この世の貴いものとして天国に上げられるのです。

ここにオスカー・ワイルドの非常にシニカルで辛辣な、かつ核心を突いたメッセージが込められていると考えられます。

生前美しい王宮で美しいものに囲まれて暮らした王子は、真の意味では「美しい」「幸福な」王子ではありませんでした。死後「幸福な王子」像となって、生前見えなかった世の中の様子を知って金銀宝石を一つずつ人々に与え、見すぼらしく惨めな姿になっていく(それはキリストの行った世の救済とは程遠い小さな営みであったかもしれませんが) ことによって、はじめて「美しい幸福な王子」となり得たのです。

最後に天国の神さまは、「黄金の都でこの幸福の王子は私を賛美するだろう」と言っています。人々はもう惨めな幸福の王子の像など賛美しませんし、金銀を与えた王子の心も賛美しません。ましてやせつせと金銀を運んだ小さなツバメのことも賛美しません。ここでの賛美の対象はあくまで「神さま」なのです。

「幸福な王子」は、死後、神の導きによって真に美しく、揺るぐことのない心を持ち得ました。王子はそのことに感謝し、神を賛美するのです。寒さに凍えながらも「こんなに寒いのに、僕は今とても温かい気持ちです」と王子の傍に寄り添っていたツバメのさえずりとともに。

美を追求し、美に殉教したとも言えるオスカー・ワイルド。しばしば傲慢で不徳な言動で世を騒がせた天才小説家は、子供向けに書いた「幸福の王子」に謙虚な本心を込めているように思われてなりません。

最後に、聖書の一節を記します。

わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。

見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。

コリントの信徒への手紙Ⅱ 4-18

明日からは夏期休暇となります。講習・補習を通して行う学びはもちろんですが、夏期休暇だからこそ体験できることに取り組み、様々なものを実際に見聞きした上で、その奥底にある「見えない」ものに目を注げるようになっていただきたいと願っています。